

令和7（2025）年度

学校評価（学校関係者評価）報告書



学校法人三重高等学校

三重高等学校

学校関係者評価報告書

令和 7 年度を評価対象期間とする『学校評価（自己評価）報告書』の内容を踏まえ、三重高等学校学校関係者評価委員会を開催し、三重高等学校の教育活動等について学校関係者評価を実施いたしましたので、その結果を以下のとおり報告いたします。

1. 日 時：令和 8（2026）年 6 月 24 日（木）19:00～20:00

2. 場 所：三重高等学校 校長室

3. 出席者：

委 員 北村 浩文（三重高等学校 PTA 会長）
馬場 一美（三重高等学校同窓会会長）

委員（学校関係） 神崎 公宏（三重高等学校長）
川北 浩史（三重高等学校教諭）、清川 英樹（三重高等学校事務職員）

司 会 進 行 河北 冠（三重高等学校学監）

4. コース等に関するご意見等

	委員からの ご意見・ご質問等	学校側の回答、 今後の取り組み等
NAVIS コース 進学・アスリート	遅刻や頭髪・服装指導、人間関係のトラブルなど、生活面での指導に課題が多いと振り返っているが、当面の改善策についてはどのように検討しているのか。	担任や学年団だけでなく、授業担当の教員も含めた包括的な指導体制の構築を検討している。生徒に関わる教員が情報を共有し、組織的かつ継続的に指導・支援を行うことで、生活指導上の課題の早期発見・早期対応を図り、生徒に寄り添った指導体制を充実させたい。
STELLA コース 特進・選抜	進路実現に対応できる学力養成を目標に掲げ、英語検定（準 2 級～2 級）の積極的な受検を促進している、とあるが、その取り組みを妨げる要因としてどのようなものがあるのか。	土曜学習会において補習や英語検定対策講座等を実施しているものの、部活動との時間的な重複により参加が困難な生徒が一定数存在する。そのため、英語検定受検に向けた学習時間の確保が十分にできないことが、取り組み推進の阻害要因の一つとなっている。
STELLA コース 特進	生徒の一般選抜受験を指導目標として掲げているが、学力層にバラツキがある中で、全体的な学力の上乗せの対策をどのように考えているか。	進学実績や進路先を重視するのではなく、生徒が入学時からどれだけ成長したかを大切にし、基礎学力の定着から応用力の養成まで、各学年・学力層に応じた指導体制を整え、全体的な学力の底上げに取り組んでいきたい。

進学コース 進学・アスリート	基本的な生活習慣の定着を目標の一つに掲げているが、その指導の成果はどのような点に表れているのか。	2 年生（2S）では、25 分遅刻の件数が大幅に減少しており、1 年次から継続して取り組んできた基本的な生活習慣の定着に向けた指導の成果が表れている。 またコース会議を通じて教科担当者にも挨拶指導の徹底を依頼し、学年・教科が連携した継続的な指導体制の充実に図っていく。
六年制高校部	国公立大学現役合格率 6 割以上の達成を目標に掲げているが、その実現に向けた高校 3 年間の教育活動や進路指導において、どのような課題があると認識しているか。	生徒によって進路に対する意識や学力に差があるため、一斉指導だけでは十分な学習支援が行き届かず、学習習慣の定着や学力向上に課題が見られる。 また、探究活動と将来の進路を十分に関連付けられていない生徒もおり、学習意欲や進路意識の向上につなげる指導に改善の余地がある。

5. 分掌に関するご意見等

	委員からの ご意見・ご質問等	学校側の回答、 今後の取り組み等
教務部 (学習指導)	生徒が主体的・能動的に取り組む授業づくりは、どういった工夫がなされているのか。	ペア・グループワークを積極的に取り入れるほか、「発問→考察・説明→全体での共有・確認」といった学習活動を通して、生徒が自ら考え、他者と意見を交換しながら学ぶ機会を設けている。また、クイズ形式による学習や時事問題を調べる活動などを取り入れ、生徒の興味・関心を高めながら、主体的・能動的に学習へ取り組む授業づくりを進めている。
生徒指導部 (生活指導等)	自転車での登下校時のヘルメット着用率を高める取り組みに苦慮している状況が伺える。	現在、自転車通学時のヘルメット着用率は約 5%にとどまっており、着用の定着が課題となっている。本校の通学路には交通量の多い区間も多いことから、安全確保の観点からもヘルメット着用の必要性について継続的に指導を行っている。今後は、国や他県における着用促進の取組や動向も参考にしながら、生徒への注意喚起や安全教育を一層徹底し、着用率の向上に努めていきたい。
探究推進部 (探究教育)	DX を活用した探究の推進を基本方針の一つとしているが、教育活動において DX をどのように活用し、どのような成果が出ているのか。	DX ハイスクール事業の採択校として、ICT 機器やデジタル技術を活用しながら、スポーツ探究や地域課題の解決に取り組むなど、学年ごとの探究活動を推進している。これらの活動を通して、生徒

		がデータの収集・分析や情報発信を行い、課題解決に向けて主体的に考え、協働して取り組む力の育成につながっていると考えている。
	総合的な探究の時間を始め、探究活動を推進しているが、生徒の学びとして重要な活動ではないか。	探究推進部を新たに設置し、重視する教育活動と位置付けている。地域の学習、自ら設定した課題の探究など、それぞれのコースで探究を推進しており、進路実現にもつながっている。今後も各コースの特色を活かして、一層進め、進路実現にもつなげていきたい。
国際教育部 (国際教育)	オーストラリアの姉妹校との交換留学や韓国での語学研修を実施しているとあるが、昨今の国際情勢や物価高などの影響はないのか。	国際情勢については、現時点で事業の実施に大きな影響は生じていない。一方で、オーストラリア、韓国ともに日本と比べて物価が高騰しており、参加費に係る自己負担が増加する傾向にあることが課題となっている。
	英語を身近に感じる機会として、どのような取組があるか。	県内の ALT に多数参加いただいて「英語セミナー」を実施している。特に世界で活躍することを目指すアスリートクラスの生徒を中心に、英語でゲームをしたり活動しながら、英語に親しむ機会となっている。
進路指導部 (進路指導等)	国公立大学、医学部医学科を含めた難関大学への現役合格者数の増加を目指している、とあるが、入試形態（一般、総合型、学校推薦型）によりその対応策はどのように異なっているのか。	一般選抜については、大学入学共通テストや個別試験に対応できる学力を身に付けさせることを重視し、総合型選抜及び学校推薦型選抜については、生徒一人ひとりの進路希望を早期に把握するとともに、総合的な探究の時間における学びや課外活動等の取組を進路実現につながられるよう支援している。
特活部 (部活動・生徒会活動等)	スポーツはデータの時代となってきている。	部活動においては、ソフトテニス部がモーションキャプチャーのデータ利用を進める等、活用の幅が広がっている。
入試広報部 (生徒募集等)	生徒募集においては、LINE やInstagramなどの SNS をより積極的に活用し、本校の魅力を一層発信していく必要がある。	LINE やInstagramによる情報発信については、その効果を検証し、今後の広報活動に生かしていきたい。
	教育活動の改善に向けた建設的な議論を行うための時間を十分に確保することが難しい現状が伺える。	教育活動の改善に向けた建設的な議論の時間を確保できるよう、会議運営や業務の見直しについても検討を進めていく。

保健環境部 (保健・人権等)	全国的に高校生の不登校や不登校傾向にある生徒が増加していると聞く。	不登校や不登校傾向にある生徒への支援として、今年度に教育支援センターを設置した結果、教育支援センターの利用をきっかけに教室復帰につながった事例も見られる。一方で、生徒の学習機会を確保しながら単位認定をどのように行うかについては課題もある。
総務部 (総務・庶務等)	オープンスクールを全教職員体制で実施することに対し、一部で不満の声があったことは残念である。学校全体で生徒募集に取り組むという共通認識のもと、教職員が一丸となって取り組む体制づくりを期待したい。	オープンスクールは学校の魅力を発信し、生徒募集につなげる重要な取組であることから、今年度も全教職員体制で実施する予定である。教職員一人ひとりが学校全体の課題として捉え、主体的に参画できるよう当事者意識の醸成を図るとともに、円滑な運営に向けた共通理解の促進に努めていく。

6. その他に関するご意見等

本校の教育活動に関して、良い評価を耳にする。	今後も教育内容や指導方法のさらなる充実を図り、生徒一人ひとりの成長と進路実現につながるよう、より良い教育活動を推進していきたい。
LINE やインスタグラムを活用した広報活動を更に展開して欲しい。	LINE やインスタグラムなどの SNS は、本校の魅力を発信する上で重要な広報ツールであると認識している。本校はクラブ活動の活躍が目されることが多いが、広報内容が特定の分野に偏らないよう、学校行事や授業、日常の学校生活、生徒の様子なども積極的に発信し、学校全体の魅力が伝わるような情報発信を進めていきたい。
学校評価アンケートの実施・公表は、生徒達自身が参加をすることで結果に反映されるといった自分事に感じられるのが良い。	学校評価アンケートは、生徒・保護者・教職員からの意見を教育活動の改善に生かすための重要な取組であると考えている。生徒自身がアンケートに参加し、その結果や改善状況を公表することで、自らの意見が学校づくりに反映されることを実感し、学校をより身近なものとして捉える機会につながるものと考えている。



写真) 三重高等学校学校関係者評価委員会の様子。